

11—生きがい

(1) わが心の底には

「かにかくにすべなきものは老にぞありける」——これは晩年の良寛の「老いをいたむ歌」の末の詞である。「すべなきもの」の最たるものが、特養に住む老人たちの身の上であるといえよう。家族から離れ、あるいは家郷を失い、世間も失われ、健康も損じてしまって、他人とまじって身をベッドに横たえる日々。その老人たちから、心の底にある本当のことを聞こうと考えた。

心の底にある願いを一人一つだけに絞って、一カ月をかけて面接調査を終えたが、結果は表13の通りである。

これらの願いは、そう願わずには生きられないぎりぎりのところからささやかれた声である。あの重病人がそういう願いをもっていたのかと驚かされるが、願いの灯は燃え続けているのである。まさに、生きることは願うことである。



養護施設の雑居性は存続を許されなくなる。保護してあげるといった慈善的、おしつけ的な処遇内容もはや手放して続けられないであろう。先に五章二節で「余りに管理的」な利用者規則を強く非難したが、そうした時代後れの処遇はたちまちに行き詰まるにちがいない。

利用者側にとっても、何もかもタダというものもらい根性から脱して、利用するという立場に立つようになることが何よりの利点であろう。

費用負担制度の確立を待って、ようやく老人ホームが市民権を得ようとしているといえる。

「すべなし」と良寛が嘆くのも、内に願いは燃え続けているのに、それを実現するすべがないという悶えである。すべがない所では願いの灯もかき消されてしまう。老人にはそのすべをさしのべねばならない。すべとは手だてであり、支えである。小さな「支持」である。それも温かくなければならぬ。温かければ、下手な手助けでも老人を支えるに充分である。

温かさは、しかし、心があれば自ら生じてくるとは限らない。まず、身をもって老人の身体にふれあう中で生じ育つものである。老人に対する支持は観念的な心の支えというよりも、まず具体的に、弱りゆく老いの体を手をもて支え、わがからだで受けとめることである。

これは任運荘の寮母が介護の中から学びとった論理である。入所当初、痴呆状態の老人たちはきまって情緒不安に陥り、錯乱する。寮母は無意識に肩に手をやり、胴に手を回す。寝たきりの人には頬をよせ、抱きかかえ、夜寝つきかねる人には、母が子にするように、手拍子で子守歌を口ずさむ。触れ合う体温はようやく心と心をつなぐのである。そうしたつながりの中から得られた五十二名の心の底にある願いが、表となって示された。

表13 あなたの本当の願いを聞かせて下さい

- | | | | |
|---|-------------------------------|----|-------|
| 1 | 家で孫と遊んだり、留守番をしたり、草とりして役に立ちたい。 | 52 | (男17) |
| 2 | 年寄りどうし仲良く暮らしていきたい。 | 23 | (男7) |
| 3 | 自分の趣味を生きがいとしたい。 | 10 | (男3) |
| 4 | 少しでもよくなって夫婦仲よくすごしたい。 | 8 | (男2) |
| | | 5 | (男2) |

- 5 病気を治してホームの草取りをしたい。
- 6 好きな人の部屋で死にたい。
- 7 どうでもよい。

4 (男1)
1 (男1)
1 (男1)

昭53年調査(当時52名現員)

五十二名のうち家と家族のある者は三十五名もいるので、家族と今一度共に暮らしたいと切望しているのが、一番多数を占めて二十三名。ホームも三年めになると、老人の「家郷恋いし」が一番強くなるようで、切実であることは当然であるが、ただ帰りたいだけではない。

家で役に立ちたい。自分でできることがある。自分でなければできないことがあると思っている。ある老婆は拘縮した足をつかみながら、歩く練習をするから草履を買ってくれと訴える。仕事で家で待っているからという。このように、誰一人として家に帰って自由がしたいとはいっていない。ぎりぎりのところから発する声はかくも美しい。

(2)の「年寄りどうし仲よく暮らしたい」には、家のない者も含まれている。家は無くなっても故郷は心の中に強く存在しているわけで、故郷で隣つきあいのある暮らしをと願っているのである。

(3)の「趣味を生きがい」の中にも、家のある者となない者が含まれている。ともかくも家郷に帰り来て、盆栽の手入れ、畑いじり、書道等に励みたいと具体的である。早く帰って「自分の生き様」を孫に語りおきたい、というのが一名その中にふくまれている。

(4)の「夫婦一緒に暮らしたい」は、別れ住む人たちにとって当然すぎる願いである。こんな身体

- 5 病気を治してホームの草取りをしたい。
- 6 好きな人の部屋で死にたい。
- 7 どうでもよい。

4 (男1)
1 (男1)
1 (男1)

昭53年調査(当時52名現員)

五十二名のうち家と家族のある者は三十五名もいるので、家族と今一度共に暮らしたいと切望しているのが、一番多数を占めて二十三名。ホームも三年めになると、老人の「家郷恋いし」が一番強くなるようで、切実であることは当然であるが、ただ帰りたいだけではない。

家で役に立ちたい。自分でできることがある。自分でなければできないことがあると思っている。ある老婆は拘縮した足をつかみながら、歩く練習をするから草履を買ってくれと訴える。仕事で家で待っているからという。このように、誰一人として家に帰って自由がしたいとはいっていない。ぎりぎりのところから発する声はかくも美しい。

(2)の「年寄りどうし仲よく暮らしたい」には、家のない者も含まれている。家は無くなっても故郷は心の中に強く存在しているわけで、故郷で隣つきあいのある暮らしをと願っているのである。

(3)の「趣味を生きがい」の中にも、家のある者となない者が含まれている。ともかくも家郷に帰り来て、盆栽の手入れ、畑いじり、書道等に励みたいと具体的である。早く帰って「自分の生き様」を孫に語りおきたい、というのが一名その中にふくまれている。

(4)の「夫婦一緒に暮らしたい」は、別れ住む人たちにとって当然すぎる願いである。こんな身体

「すべなし」と良寛が嘆くのも、内に願いは燃え続けているのに、それを実現するすべがないという悶えである。すべがない所では願いの灯もかき消されてしまう。老人にはそのすべをさしのべねばならない。すべとは手だてであり、支えである。小さな「支持」である。それも温かくなければならぬ。温かければ、下手な手助けでも老人を支えるに充分である。

温かさは、しかし、心があれば自ら生じてくるとは限らない。まず、身をもって老人の身体にふれあう中で生じ育つものである。老人に対する支持は観念的な心の支えというよりも、まず具体的に、弱りゆく老いの体を手をもて支え、わがからだで受けとめることである。

これは任運荘の寮母が介護の中から学びとった論理である。入所当初、痴呆状態の老人たちはきまって情緒不安に陥り、錯乱する。寮母は無意識に肩に手をやり、胴に手を回す。寝たきりの人には頬をよせ、抱きかかえ、夜寝つきかねる人には、母が子にするように、手拍子で子守歌を口ずさむ。触れ合う体温はようやく心と心をつなぐのである。そうしたつながりの中から得られた五十二名の心の底にある願いが、表となって示された。

表13 あなたの本当の願いを聞かせて下さい

- | | | | |
|---|-------------------------------|----|-------|
| 1 | 家で孫と遊んだり、留守番をしたり、草とりして役に立ちたい。 | 52 | (男17) |
| 2 | 年寄りどうし仲良く暮らしていきたい。 | 23 | (男7) |
| 3 | 自分の趣味を生きがいとしたい。 | 10 | (男3) |
| 4 | 少しでもよくなって夫婦仲よくすごしたい。 | 8 | (男2) |
| | | 5 | (男2) |

では「主人に迷惑をかけるから」とか、「主人の身体がもたない」などと、思いは深く、よく弁えていて、一刻も早くよくなることをわが身に祈っている。

しかし、家にいる相手たちにその気は全くない。面会も途絶えがちで、いらだちをさえ与えている。ある老女の狂乱状態を見るに忍びず、夫を呼びよせると、しぶしぶ来た夫に買いいいたぶどう酒等を与えて大喜びをするのだが、夫はそっぽを向いて、「こんな難しい奴と、もうご免蒙る」とつぶやいていた。

だから、「夫婦一緒に」は誰がみても空想のようなものに過ぎないが、本人にとってはこれほど実体をもった願いはない。だから、寮母たちはその心が消えぬよう支え続ける。

(5)の「ホームの草取りを」と願っている人たちは、もう帰るべき家がないか、家を拒否しているもので、任運荘をわが家と思い定めているわけである。ホームで少しでも役立ちたいという願ひである。

人間はただ生きているだけの存在ではない。「意味への意志」(フランクフル)は人間にとって根源的なものである。だから、いかに老衰期であろうとも、自分の生きる意味は追求されるべきものであろう。自分以外のものに思いをかけて生きる、それなるが故に、人生は意味をもってくる。生きがいがある。

特養に住む老人たちも全く同じ人生の意味を、じつは追求していることを、私たちは知らされた。ただ、老人たちは自力でその意味を追求実現するには、余りにもすべのない立場に位置している。

だから、老人がかかる思い以上の思いを、老人のために用意しなければならない。生きがいのもてる状況を整えねばならない。これは相当至難なことであるが、老人処遇の基本とされるべきである。さて、最後の「好きな人の部屋で死にたい」という男性のつぶやくように発した言葉は、私たちの心をいつまでも絞りつづけている。重篤の身となり、静養室に移った今わの際の声であつたから、そのひと言に婦人を惹うてやまない切ないものが溢れていて、哀しく胸に迫ってくる。「憧れなくて、何の人の世の生きられよう」——これはある詩人の若き日のメモであるが、死の待合室にも愛の思いは流れやまず、憧れはつきることがない。

しかし、この願いは叶えられないまま、ついに数日して昇天していった。片想いであつたから。ここで、老人ホームの老人の性と愛が考えられねばならなくなった。

(2) 愛と性

「好きな人の部屋で死にたい」——死の場面において愛が求められていることに、ひとは驚くかもしれない。

しかし、よく考えてみると、生ある限り諸欲は死滅することはないし、死においてこそ生においてと同じように、愛は求められて当然であろう。ひとり旅立つことを予感する時、確かなものにするがろうとする。愛はその確かなるものの一つとされてよい。とくに、男性老人の場合、性愛の形

だから、老人がかかる思い以上の思いを、老人のために用意しなければならない。生きがいのもてる状況を整えねばならない。これは相当至難なことであるが、老人処遇の基本とされるべきである。さて、最後の「好きな人の部屋で死にたい」という男性のつぶやくように発した言葉は、私たちの心をいつまでも絞りつづけている。重篤の身となり、静養室に移った今わの際の声であつたから、そのひと言に婦人を惹うてやまない切ないものが溢れていて、哀しく胸に迫ってくる。「憧れなくて、何の人の世の生きられよう」——これはある詩人の若き日のメモであるが、死の待合室にも愛の思いは流れやまず、憧れはつきることがない。

しかし、この願いは叶えられないまま、ついに数日して昇天していった。片想いであつたから。ここで、老人ホームの老人の性と愛が考えられねばならなくなった。

(2) 愛と性

「好きな人の部屋で死にたい」——死の場面において愛が求められていることに、ひとは驚くかもしれない。

しかし、よく考えてみると、生ある限り諸欲は死滅することはないし、死においてこそ生においてと同じように、愛は求められて当然であろう。ひとり旅立つことを予感する時、確かなものにするがろうとする。愛はその確かなるものの一つとされてよい。とくに、男性老人の場合、性愛の形

では「主人に迷惑をかけるから」とか、「主人の身体がもたない」などと、思いは深く、よく弁えていて、一刻も早くよくなることをわが身に祈っている。

しかし、家にいる相手たちにその気は全くない。面会も途絶えがちで、いらだちをさえ与えている。ある老女の狂乱状態を見るに忍びず、夫を呼びよせると、しぶしぶ来た夫に買いいいたぶどう酒等を与えて大喜びをするのだが、夫はそっぽを向いて、「こんな難しい奴と、もうご免蒙る」とつぶやいていた。

だから、「夫婦一緒に」は誰がみても空想のようなものに過ぎないが、本人にとってはこれほど実体をもった願いはない。だから、寮母たちはその心が消えぬよう支え続ける。

(5)の「ホームの草取りを」と願っている人たちは、もう帰るべき家がないか、家を拒否しているもので、任運荘をわが家と思い定めているわけである。ホームで少しでも役立ちたいという願いである。

人間はただ生きているだけの存在ではない。「意味への意志」(フランケル)は人間にとって根源的なものである。だから、いかに老衰期であろうとも、自分の生きる意味は追求されるべきものであろう。自分以外のものに思いをかけて生きる、それなるが故に、人生は意味をもってくる。生きがいがある。

特養に住む老人たちも全く同じ人生の意味を、じつは追求していることを、私たちは知らされた。ただ、老人たちは自力でその意味を追求実現するには、余りにもすべのない立場に位置している。

で求められているというのが一般的傾向ではなからうか。

任運荘に二組の夫婦があり、夫婦部屋で生活をしていたが、夫たちは最後まで性を離れていなかった。

一組は夫婦とも老衰と痴呆化が進行し、二人は半年もおかないで、相次ぎ死亡するが、夫は妻の上に乗ることをくり返えていた。妻はすでに両脚が硬直し開閉不能であったので、晩年は登っては転げ落ちていた。見かねた二人の寮母は夫を両方から支えて妻の上に乗せてあげたが、ただそれだけで満足する。やがて意識を失って、一週間後に昇天した。

寮母は落ちては登る姿をおかしいともおぞましいとも思わず、わが身にひき比べて、その介助をなし終えているが、介護のプロとして承認されてよいであろう。介護の中に性の介護があって当然とされるべきである。老人の性を受容することは、日本の女性にとって容易なことではない。

もう一組は悲しい結末となった。激しく要求する夫を理解できず、妻はあしざまに罵るようになり、ついに夫は錯乱狂暴の状態になる。妻をみる眼は怒りに燃え、耐えられず妻は娘の家に逃げ出してしまふ。衰える身体とは逆に、欲望はなお残り、けいれん痙攣状態のようになるまで興奮をする。

しかし、寮母たちはもう慌てない。男性の鎮静方法は一つしかない。熱いタオルで下半身を広く丹念にマッサージする。やがてさしもの興奮も次第に静まり、すやすやと寝入るのである。男性の終末介護法の一つとしてこのことは特記されるべきであろう。

その夫婦間の調整をする暇もなく、夫の終末が近づく。急ぎ呼び戻された妻を見ても、怒りは消

えず、妻の手を拒絶する程である。寮母は自分たちの方法を老妻に教えて実行させると、顔は和み始め、妻に手をとられて静かな旅立ちをしていった。

終末においても性愛がなお求められているとしても、任運荘の寮母たちにとって今では、それは厳粛な欲望の一つとして受けとめられている。しかし、単なる観念的な理解としてでなく、そうした事例を多く経験せざるをえない場面からの理解である。このことは重要である。

ホームの最年長者Mさんは九十七歳。次第に失明に近づき、全盲になって三年になるが、当然のこと初めは狂ったように、「明りをくれー」「電気をつけてー」と壁を伝って動いていた。半年過ぎると、明りを求める声はなくなり、ふしぎと性欲求が強く現れた。すべてが夜のせいもあろう人目を気にすることもなくなったためか、動作は露骨である。おむつ換えの寮母に抱きつき、「ここに寝なー」と求める。そのつどおむつに注がれている。その後は平靜な日が続く。年をとっても性欲だけが強く本能として生き続けている好例である。

特養ホームでは入浴は男女混浴にしている場合が意外に多い。それは男女が和みあう雰囲気が生ずるからとされている。

任運荘では男女別々に入ることになっており、順番は男女交互にしている。男性が先順の時は時間になっても誰も入ろうとしない。理由をつけてぐずぐずしている。寮母からせかされるようにして入浴するが、その時はすでに後順の女性の入浴時間になっている。できるだけ接近させて、混浴

えず、妻の手を拒絶する程である。寮母は自分たちの方法を老妻に教えて実行させると、顔は和み始め、妻に手をとられて静かな旅立ちをしていた。

終末においても性愛がなお求められているとしても、任運荘の寮母たちにとって今では、それは厳粛な欲望の一つとして受けとめられている。しかし、単なる観念的な理解としてでなく、そうした事例を多く経験せざるをえない場面からの理解である。このことは重要である。

ホームの最年長者Mさんは九十七歳。次第に失明に近づき、全盲になって三年になるが、当然のこと初めは狂ったように、「明りをくれー」「電気をつけてー」と壁を伝って動いていた。半年過ぎると、明りを求める声はなくなり、ふしぎと性欲求が強く現れた。すべてが夜のせいもあるう人目を気にすることもなくなったためか、動作は露骨である。おむつ換えの寮母に抱きつき、「ここに寝なー」と求める。そのつどおむつに注がれている。その後は平靜な日が続く。年をとっても性欲だけが強く本能として生き続けている好例である。

特養ホームでは入浴は男女混浴にしている場合が意外に多い。それは男女が和みあう雰囲気が生ずるからとされている。

任運荘では男女別々に入ることになっており、順番は男女交互にしている。男性が先順の時は時間になっても誰も入ろうとしない。理由をつけてぐずぐずしている。寮母からせかされるようにして入浴するが、その時はすでに後順の女性の入浴時間になっている。できるだけ接近させて、混浴

で求められているというのが一般的傾向ではなからうか。

任運莊に二組の夫婦があり、夫婦部屋で生活をしていたが、夫たちは最後まで性を離れていなかった。

一組は夫婦とも老衰と痴呆化が進行し、二人は半年もおかないで、相次ぎ死亡するが、夫は妻の上に乗ることをくり返えていた。妻はすでに両脚が硬直し開閉不能であつたので、晩年は登っては転げ落ちていた。見かねた二人の寮母は夫を両方から支えて妻の上に乗せてあげたが、ただそれだけで満足する。やがて意識を失って、一週間後に昇天した。

寮母は落ちては登る姿をおかしいともおぞましいとも思わず、わが身にひき比べて、その介助をなし終えているが、介護のプロとして承認されてよいであろう。介護の中に性の介護があつて当然とされるべきである。老人の性を受容することは、日本の女性にとって容易なことではない。

もう一組は悲しい結末となつた。激しく要求する夫を理解できず、妻はあしざまに罵るようになり、ついに夫は錯乱狂暴の状態になる。妻をみる眼は怒りに燃え、耐えられず妻は娘の家に逃げ出してしまふ。衰える身体とは逆に、欲望はなお残り、けいれん痙攣状態のようになるまで興奮をする。

しかし、寮母たちはもう慌てない。男性の鎮静方法は一つしかない。熱いタオルで下半身を広く丹念にマッサージする。やがてさしもの興奮も次第に静まり、すやすやと寝入るのである。男性の終末介護法の一つとしてこのことは特記されるべきであろう。

その夫婦間の調整をする暇もなく、夫の終末が近づく。急ぎ呼び戻された妻を見ても、怒りは消

になるように引延ばしているわけである。

逆に女性が先順の日は時間が来ないのに待ちうけて潜りこもうとする。全くユーモラスな風景であるが、男性群にとっては考えぬいた行動である。ほとんどの女性もこれを拒否しない。

だからといって、これを公然と認めることはしない。三人ほどの婦人は恥ずかしがっている。羞恥心を大切にしなければ精神の老化を早めるからである。一時、混浴にしたが、直ちにとりやめねばならなかった。男性たちが卑猥なやりとりをしていたからである。「あの女はよい。一度寝てみたい」とか、「そうか、こんどよく見てみよう」など隠微に流れようとした。集団生活では何らかの限界が必要であろう。

衰弱した男性と骨折の女性、全く動けそうにないその男女を二人部屋に入れた。予想どおり女性は女性らしく優しくなり、心が活潑化する効果があがった。しかし、ある夜、身動きもできないと思っていた男性が、婦人のベッドにとりつくようにして、手を取り、「ナー、ナー」と促し、訴えているではないか。相手は「イヤッ、イヤッ」といっているつもりであろうが、「ヘッ、ヘッ」と断っている。

見つけた寮母が優しく声をかけ、元のベッドへ抱きあげる。翌朝、しかし、当の老女は怒り騒ぐこともなく、かえって「姿が見えないが、どこ行ったな、ご飯たべたかな」と心配している。想いをかけられることは、迷惑でも、それ以上に心をはずませてくれるようだ。

多くの場合、特養での老人たちの性愛はただ想い想われる雰囲気ですら十分に満たされているといえ

よう。

比較的元氣そうな老人には女性の眼が注がれるようだ。広場の長椅子に座っているその老人のそばにさり気なく腰を下ろし、半ば見上るようにして話す婦人の顔は喜びを隠しようもない。向う側で見ているもう一人の婦人の眼は何とけわしく光っていることか。三角関係のもつれもただ傍で話しが出来るかどうかにかかっているに過ぎないのだろう。

しかし、激しい恋の鞘当て事件が珍しく一件あった。一番美しいC婦人から遊びにおいでと訪問をさそわれたA老が、それを誤解して夜間ベッドに忍びよったが、驚いたC女が強硬に拒絶する。胸が迫ると、Cは特有のハァハァと掠れ声になる。それが悪かった。ほかにCに想いをよせているB老がいる。B老は女であればどこへでも侵入を試みる常習者。偶然、C女とB老とが一緒の時刻に便所になっっている。ハァハァ声はてっきりそのことを約束していたせいだったと早とちりしたAがBに襲いかかったのである。元巡査だけあって腕力は一番強い。しかし、怪我はなかった。それが原因ではないが、やがてAは退所していった。

男たちは若い寮母が介護すると、局部に強烈な反応を示し、ある時は差し込む尿器一杯になって寮母を嘔吐させたことがある。手なれた寮母はさつさとすませて引きあげるが、若い寮母にはいろいろ注文をつけて長引かせ、尿器の出入をくり返えさせて思いをとげようとする。日がな一日寝たままそのことに計画を集中しているのであろう。欲望を何とか満たすことに成功しているようだ。

よう。

比較的元氣そうな老人には女性の眼が注がれるようだ。広場の長椅子に座っているその老人のそばにさり気なく腰を下ろし、半ば見上るようにして話す婦人の顔は喜びを隠しようもない。向う側で見ているもう一人の婦人の眼は何とけわしく光っていることか。三角関係のもつれもただ傍で話しが出来るかどうかにかかっているに過ぎないのだろう。

しかし、激しい恋の輓当て事件が珍しく一件あった。一番美しいC婦人から遊びにおいでと訪問をさそわれたA老が、それを誤解して夜間ベッドに忍びよったが、驚いたC女が強硬に拒絶する。胸が迫ると、Cは特有のハハハと掠れ声になる。それが悪かった。ほかにCに想いをよせているB老がいる。B老は女であればどこへでも侵入を試みる常習者。偶然、C女とB老とが一緒の時刻に便所になっっている。ハハハハ声はてっきりそのことを約束していたせいだったと早とちりしたAがBに襲いかかったのである。元巡査だけあって腕力は一番強い。しかし、怪我はなかった。それが原因ではないが、やがてAは退所していった。

男たちは若い寮母が介護すると、局部に強烈な反応を示し、ある時は差し込む尿器一杯になって寮母を嘔吐させたことがある。手なれた寮母はさっさとすませて引きあげるが、若い寮母にはいろいろ注文をつけて長引かせ、尿器の出入をくり返えさせて思いをとげようとする。日がな一日寝たままそのことに計画を集中しているのであろう。欲望を何とか満たすことに成功しているようだ。

になるように引延ばしているわけである。

逆に女性が先順の日は時間が来ないのに待ちうけて潜りこもうとする。全くユーモラスな風景であるが、男性群にとっては考えぬいた行動である。ほとんどの女性もこれを拒否しない。

だからといって、これを公然と認めることはしない。三人ほどの婦人は恥ずかしがっている。羞恥心を大切にしなければ精神の老化を早めるからである。一時、混浴にしたが、直ちにとりやめねばならなかった。男性たちが卑猥なやりとりをしていたからである。「あの女はよい。一度寝てみたい」とか、「そうか、こんどよく見てみよう」など隠微に流れようとした。集団生活では何らかの限界が必要であろう。

衰弱した男性と骨折の女性、全く動けそうにないその男女を二人部屋に入れた。予想どおり女性は女性らしく優しくなり、心が活潑化する効果があがった。しかし、ある夜、身動きもできないと思っていた男性が、婦人のベッドにとりつくようにして、手を取り、「ナー、ナー」と促し、訴えているではないか。相手は「イヤッ、イヤッ」といっているつもりであろうが、「ヘッ、ヘッ」と断っている。

見つけた寮母が優しく声をかけ、元のベッドへ抱きあげる。翌朝、しかし、当の老女は怒り騒ぐこともなく、かえって「姿が見えないが、どこ行っただな、ご飯たべたかな」と心配している。想いをかけられることは、迷惑でも、それ以上に心をはずませてくれるようだ。

多くの場合、特養での老人たちの性愛はただ想い想われる雰囲気ですら十分に満たされているといえ

身体が硬直状態の寝たきり老人が一人いるが、ナース・コールを押しては寮母を呼び、脚をさすることを求め、もつと上もつと上と懇願する。しかし、そこまで至ろうとする時、寮母たちはパタッと太股を軽くたたいて、「ハイそれまで」と中止し、頭や耳をさすってあげる。これはふしぎと効果的で、欲望は納まり満足するようである。気分が転換させられるからである。

おむつ換え。当の男の老人たちにとってこれはかくれた快楽の一時である。彼はとり換えてくれる時間の一刻も長からんことを切望している。便器で用便できるのに、おむつに包まれることを要求する男性の存在は特異なケースではない。介護する女性がいるかぎり、「おむつ希求」は男性にとって本能的なものかもしれない。

清拭の時はなおさらである。清拭は当然身の始末が自分でできない者にする介護であるが、熱いタオルで何枚も何回も全身を拭かれている光景を、隣のベッドから見つめている男たちの二つの眼は異常に光っている。寮母は背にそれを感じながら手際よくすませていく。

もう少し正確にいうと、おむつ換えても清拭でも、カーテンを引いてしているので、丸出しで見えるわけではない。カーテンの下方から寮母の足の動きだけが見られる。それだけに男性たちの想念は一層昂まるのである。こう見ると、任運荘の男性全員が性の欲求を失わず、何らかの形ではけ場を求めているといえよう。性に定年なし、という言葉は本当だ。

女性の場合はどうか。

清拭の時、もっと熱いのでしてくれ、もっと奥まで拭いてくれと要求するのが一人。これは稀な例外であるが、要求としていわないだけで、一つの快楽であることは皆も同じであろう。この婦人は先に見たB老が夜間ひそかに訪れるのを心待っているらしい。B老は寮母の作業時間帯をよく見ているので、一晚中チャンスをうかがっている。夜勤寮母の苦勞の種である。

もう一人欲求不満を激しくぶっつけていた婦人がある。夜も昼も狂ったように「いんばい女」と呼ぶ。すべて女は、寮母でさえも夫をたぶらかす「いんばい」に見え、この人もB老のねらいをつけている一人である。尿が出ないのにおむつが濡れていることがしばしばである。

任運荘の婦人たちはこうした二つの例外を除くと、性においてその表現は静そのもののようである。

こう見てくると、『老年期の性』（大工原秀子著・ミネルヴァ書房）の調査結果と大差がないようだ。「男子老人の全員近くの九二％が性的欲求はあると答えている。女子老人はどうでしょう。全く欲求が「ない」と半数以上の約六割が答えて、「あり」は四割。

それでは、異性に対する性的欲求の程度はどうなのでしょう。

男子老人五四・七％は「性行為を欲する」と答えています。女子は六・三％。

二番目には、「異性とたわむれる程度」男子は一三・七％、女子四・二％。「異性と精神的交際のみを求める」と答えた男子老人は一三・二％で、女子は一三・五％と、女子が男子よりはじめて

清拭の時、もっと熱いのでしてくれ、もっと奥まで拭いてくれと要求するのが一人。これは稀な例外であるが、要求としていわないだけで、一つの快楽であることは皆も同じであろう。この婦人は先に見たB老が夜間ひそかに訪れるのを心待っているらしい。B老は寮母の作業時間帯をよく見ているので、一晚中チャンスをうかがっている。夜勤寮母の苦勞の種である。

もう一人欲求不満を激しくぶっつけていた婦人がある。夜も昼も狂ったように「いんばい女」と呼ぶ。すべて女は、寮母でさえも夫をたぶらかす「いんばい」に見え、この人もB老のねらいをつけている一人である。尿が出ないのにおむつが濡れていることがしばしばである。

任運荘の婦人たちはこうした二つの例外を除くと、性においてその表現は静そのもののようである。

こう見てくると、『老年期の性』（大工原秀子著・ミネルヴァ書房）の調査結果と大差がないようだ。

「男子老人の全員近くの九二％が性的欲求はあると答えている。女子老人はどうでしょう。全く欲求が「ない」と半数以上の約六割が答えて、「あり」は四割。

それでは、異性に対する性的欲求の程度はどうなのでしょう。

男子老人五四・七％は「性行為を欲する」と答えています。女子は六・三％。

二番目には、「異性とたわむれる程度」男子は一三・七％、女子四・二％。「異性と精神的交際のみを求める」と答えた男子老人は一三・二％で、女子は一三・五％と、女子が男子よりはじめて

身体が硬直状態の寝たきり老人が一人いるが、ナース・コールを押しては寮母を呼び、脚をさすることを求め、もつと上もつと上と懇願する。しかし、そこまで至ろうとする時、寮母たちはパタッと太股を軽くたたいて、「ハイそれまで」と中止し、頭や耳をさすってあげる。これはふしぎと効果的で、欲望は納まり満足するようである。気分が転換させられるからである。

おむつ換え。当の男の老人たちにとってこれはかくれた快楽の一時である。彼はとり換えてくれる時間の一刻も長からんことを切望している。便器で用便できるのに、おむつに包まれることを要求する男性の存在は特異なケースではない。介護する女性がいるかぎり、「おむつ希求」は男性にとって本能的なものかもしれない。

清拭の時はなおさらである。清拭は当然身の始末が自分でできない者にする介護であるが、熱いタオルで何枚も何回も全身を拭かれている光景を、隣のベッドから見つめている男たちの二つの眼は異常に光っている。寮母は背にそれを感じながら手際よくすませていく。

もう少し正確にいうと、おむつ換えても清拭でも、カーテンを引いてしているので、丸出しで見えるわけではない。カーテンの下方から寮母の足の動きだけが見られる。それだけに男性たちの想念は一層昂まるのである。こう見ると、任運荘の男性全員が性の欲求を失わず、何らかの形ではけ場を求めているといえよう。性に定年なし、という言葉は本当だ。

女性の場合はどうか。

高い精神的欲求を示しました。

“その他”と答えた男子一八・四%、女子は二六%でした。

“その欲求を否定、面倒、または無し”と答えた女子は五〇%、男子は否定者一人もいません。このことから女子の欲求はごく淡い印象を受けますが、単に淡いだけなのかどうか……」。

老人だけが集合して生活する老人ホームはもともと異常社会である。その上男だけの部屋女だけの部屋という集団、それは異常集団である。たしかに老人ホームは異常社会である。しかし、ここは親類でも親子でもない他人の集団だから、男女ごちゃまぜにする混合入浴、混合部屋を私たちは原則として肯定しない。伴侶はそれぞれ生きて別れ住んでいるし、根元的には人格の尊厳を大切にしたいためである。

老人の性を肯定すること、男女の性の壁をとり外すことは別の問題であると考える。特養ホームにおける老人の性愛について、私たちは確信のある見解をもたないが、任運荘においては性愛については消極的な肯定である。

今、流行の「老人の性愛のすすめ」も、老人に責任をもとうとするなら、消極的に対処するより外に方法がない。消極的とはしかし見方を変えれば積極的ともいえよう。

レクリエーションを日常化し、リハビリテーション活動を生活化し、それぞれの語らいの機会と場を多くし、行事の中で全員のスキンシップを深める。特に寮母たちとの接触も効果的な場面とな

っている。

最近、久しぶりに家庭復帰者一人があった。家庭も強く引き取りを希望するが、本人が頑固に拒否し続けていた。その理由はホームには男女交際があるが、家庭に帰ればその希望が満たされないと恐れたからである。こうして考えようによっては、老人ホームには男女の話しあいの温かい交際がいつも用意されているともいえよう。

老人だけの集団生活という異様さは、それなりに老人男女のぬくもりある友愛集団に高めることができるはずである。

「静養室」―それはたしかに死の臭いがする。病が篤くなるとそこに移される。どこの特養ホームでもそのことは同じであろう。ただ任運荘ではその部屋で寮母の頻繁な世話が集中され、老人たちの訪問も病院見舞のように改まったかたちでなされる。だから、快方に向うことも多く、ここは必ずしも死の待合室ではない。入室を恐れる者はいない。全寮母の手がその身体に温かく触れられるからであろう。

今日も放送が流れている。「静養室にはMさんがおられます。親しい皆さんのお見舞をお願いします」。

同郷のN女が話しを終えて退室する時、握手をして別れた。Mさんは握られたその手をそっと頬にあてて、にっこり微笑しているではないか。長いこと。幼なじみの親しさもここではお互に愛に

っている。

最近、久しぶりに家庭復帰者一人があった。家庭も強く引き取りを希望するが、本人が頑固に拒否し続けていた。その理由はホームには男女交際があるが、家庭に帰ればその希望が満たされないと恐れたからである。こうして考えようによっては、老人ホームには男女の話しあいの温かい交際がいつも用意されているともいえよう。

老人だけの集団生活という異様さは、それなりに老人男女のぬくもりある友愛集団に高めることができるはずである。

「静養室」――それはたしかに死の臭いがする。病が篤くなるとそこに移される。どこの特養ホームでもそのことは同じであろう。ただ任運荘ではその部屋で寮母の頻繁な世話が集中され、老人たちの訪問も病院見舞のように改まったかたちでなされる。だから、快方に向うことも多く、ここは必ずしも死の待合室ではない。入室を恐れる者はいない。全寮母の手がその身体に温かく触れられるからであろう。

今日も放送が流れている。「静養室」にはMさんがおられます。親しい皆さんのお見舞をお願いします」。

同郷のN女が話しを終えて退室する時、握手をして別れた。Mさんは握られたその手をそっと頬にあてて、にっこり微笑しているではないか。長いこと。幼なじみの親しさもここではお互に愛に

高い精神的欲求を示しました。

“その他”と答えた男子一八・四%、女子は二六%でした。

“その欲求を否定、面倒、または無し”と答えた女子は五〇%、男子は否定者一人もいません。このことから女子の欲求はごく淡い印象を受けますが、単に淡いだけなのかどうか……」。

老人だけが集合して生活する老人ホームはもともと異常社会である。その上男だけの部屋女だけの部屋という集団、それは異常集団である。たしかに老人ホームは異常社会である。しかし、ここは親類でも親子でもない他人の集団だから、男女ごちゃまぜにする混合入浴、混合部屋を私たちは原則として肯定しない。伴侶はそれぞれ生きて別れ住んでいるし、根元的には人格の尊厳を大切にしたいためである。

老人の性を肯定すること、男女の性の壁をとり外すことは別の問題であると考える。特養ホームにおける老人の性愛について、私たちは確信のある見解をもたないが、任運荘においては性愛については消極的な肯定である。

今、流行の「老人の性愛のすすめ」も、老人に責任をもとうとするなら、消極的に対処するより外に方法がない。消極的とはしかし見方を変えれば積極的ともいえよう。

レクリエーションを日常化し、リハビリテーション活動を生活化し、それぞれの語らいの機会と場を多くし、行事の中で全員のスキンシップを深める。特に寮母たちとの接触も効果的な場面とな

見まごうてくるのであろうか。

ああ、老人ホームでの愛も、若き日の愛のごとく、「はにかみて、おもてあからめ」て、哀しくも美しい。

七十歳で結婚した詩人川田順は、「墓場に近き老いらくの 恋は怖るる何もなし」と歌った。しかし、任運荘ではまだそういう灼熱の恋はなさそうだ。それはきっと老人ホームでの性における無原則を、私たちが肯定しないからであらう。

(3) よりよく生きること

今、日本では生きがい論が盛んである。とくに、それが主婦の側と老人層において強く問題とされている。老人ホームに住む老人にとってもこのことは同様であり、生きがいについて素通りすることはできないであらう。

私の若き日の教え子で重病のまま寝ついている千葉千代子さんは、学業途中発病し絶対安静のまゝ奇蹟的に生き続けて三十五年に至っている。本年の年賀に「残る世を老いたる母と病む吾とうかがえにし重たかるべし」と一首をそえていた。

老母と娘が血縁とはいいいながら、病む娘を看護することのでつながらあう運命を泣きながら耐えつづける姿は悲痛である。岩手の山里に絶望幾千度ふみ越えふみ越えして、今日の一日をと願ひ止

まぬ人生は壮烈としかいいようがない。ようやく、その死も今は彼女の友となったのだろうか。古き学友がたまに訪ね来て、去り際に、「私の方が逆に励まされる」というようである。病み続ける彼女は、病むこと以外何もしない。老母に重い荷を負わし続けているだけの生である。

生きがいなしと自分を観じ、すべてを捨てすべてを任せたその中に、そのまま生きがい人が伝わっていく不思議な構造を、ここに見る。

このことは何を意味するか。何ができるか、何の役に立っているか、生きがいを考える時、それらのことは根本的なことではない。何もできなくてもよい。どうひとが主体的に生きているか、ただそれだけが問われているということである。

旅路の果てを特養ホームに憩う老人たちにとっても、このことが根本的に問われていることに差異のあらうはずはない。任運荘の老人たちにそうした生きざまを、介護の中で私たちは見せつけられる。

特養に住む病老人たちの運命はいわば限界的状況ということができよう。彼らはその運命を受容し、なお自らのなるべき者へと自己を導いている。先にも述べた石原ノへさんはおむつをするようになったため、養護ホームから強制的に任運荘に移された。そのため、しばらくは絶望的な日々を送っていた。やがて、頑張っている老人たちを見つめることを通して、歩行器を使って歩くことを目標にし、今ではおむつもとれ、便所にも独りで行ける程の自立ぶりである。倒れた時の骨折を心配して、寮母が後から支えようと構えていると、「倒れ方の練習もしておかない」といって斥け

まぬ人生は壮烈としかいいようがない。ようやく、その死も今は彼女の友となったのだろうか。古き学友がたまに訪ね来て、去り際に、「私の方が逆に励まされる」というようである。病み続ける彼女は、病むこと以外何もしない。老母に重い荷を負わし続けているだけの生である。

生きがいなしと自分を観じ、すべてを捨てすべてを任せたその中に、そのまま生きがいが人に伝わっていく不思議な構造を、ここに見る。

このことは何を意味するか。何ができるか、何の役に立っているか、生きがいを考える時、それらのことは根本的なことではない。何もできなくてもよい。どうひとが主体的に生きているか、ただそれだけが問われているということである。

旅路の果てを特養ホームに憩う老人たちにとっても、このことが根本的に問われていることに差異のあろうはずはない。任運荘の老人たちにそうした生きざまを、介護の中で私たちは見せつけられる。

特養に住む病老人たちの運命はいわば限界的状況ということができよう。彼らはその運命を受容し、なお自らのなるべき者へと自己を導いている。先にも述べた石原ノへさんはおむつをするようになったため、養護ホームから強制的に任運荘に移された。そのため、しばらくは絶望的な日々を送っていた。やがて、頑張っている老人たちを見つめることを通して、歩行器を使って歩くことを目標にし、今ではおむつもとれ、便所にも独りで行ける程の自立ぶりである。倒れた時の骨折を心配して、寮母が後から支えようと構えていると、「倒れ方の練習もしておかない」といって斥け

見まごうてくるのであろうか。

ああ、老人ホームでの愛も、若き日の愛のごとく、「はにかみて、おもてあからめ」て、哀しくも美しい。

七十歳で結婚した詩人川田順は、「墓場に近き老いらくの 恋は怖るる何もなし」と歌った。しかし、任運荘ではまだそういう灼熱の恋はなさそうだ。それはきっと老人ホームでの性における無原則を、私たちが肯定しないからであらう。

(3) よりよく生きること

今、日本では生きがい論が盛んである。とくに、それが主婦の側と老人層において強く問題とされている。老人ホームに住む老人にとってもこのことは同様であり、生きがいについて素通りすることはできないであらう。

私の若き日の教え子で重病のまま寝ついている千葉千代子さんは、学業途中発病し絶対安静のまま奇蹟的に生き続けて三十五年に至っている。本年の年賀に「残る世を老いたる母と病む吾とうかがえにし重たかるべし」と一首をそえていた。

老母と娘が血縁とはいいいながら、病む娘を看護することのでつながらあう運命を泣きながら耐えつづける姿は悲痛である。岩手の山里に絶望幾千度ふみ越えふみ越えして、今日の一日をと願ひ止

る。彼女は天涯孤独の身であるので、「私の仕事はご先祖の霊を祀ることだから、一日でも一分でも長生きしなければ」と目標を明確に定めている。

もう一人次郎丸タズ（八五）さんのことを、『にんうん荘』（26号・55・5・10）で見よう。

次郎丸さんは子供がないため嫁ぎ先から故郷の緒方町に帰り、甥の風呂屋の番台に座って身をたてていましたが、老齢になり床に伏すようになってからは、任運荘に入りたいと願いました。五ヵ月待って入所できた時の顔には喜びが溢れていました。

他の人たちが歩行器を利用してゐるのを見て、早速練習したいと、自分専用の歩行器の購入を申し込めます。老人は自費で購入するのを渋りがちだが、次郎丸さんは行動が積極的です。

病院生活の延長と想つか、寝巻きのまま歩くので、朝起きたら着換えて、廊下をきちんとした身なりをするようお願いするのだが、耳が遠いので分かってもらえない。他の人の服装と見比べさせると、コックリとうなずきます。今では一番こざっぱりした身なりです。

「できることはやらなきゃあ、甘えてはいかん」自分にいいかせる。ベッドの上で縫い物をしたり、小物の洗いのものは洗濯場を利用します。次郎丸さんも三度の食事を食堂でします。雑然とおかれた歩行器を一台ずつ整理して、出入のじゃまにならないようにしたり、食事がすむと身体の不自由な人のために歩行器を持ちより、助けています。

不自由な足、重い難聴、頭痛、不眠といった障害を越えて、いやな顔一つ見せず、気持ちよいお

せわをしている。「食堂で食べるとみそ汁がとくに熱くておいしい」と語りかけます。

毎月の誕生会にはその老人たちの生活歴を寸劇で紹介することになっている。番台に坐った次郎丸さんの昔の姿が演じられ始めると、最初は驚き、次は手をたたいて喜びました。「いい湯だな」の歌が流れると、手拍子を打って大きな声で歌い始めます。ホームに来て初めての歌声です。

昔の経験が生かされてか、どんな気むずかしい人とも仲良くする力を持っています。彼女はたばこが好き。自分が飲む前に、必ず歩行器にすがって同室の山内さんに飲ませてあげます。次郎丸さんと同室になるまでは大声を出して欲求を発散させていた山内さん。その山内さんが「よか人と一緒になった」と、たばこをおいしそうに飲みながら話します。

月末は老人と担当寮母が共に話しあう反省日に当てられる。次郎丸さんは眼を細めて寮母に語ります。「わしゃ、若い時から苦勞したけれど、本当の幸せは、このホームに来た時が一番じゃよ」。次郎丸さんの日々、それは平凡なりに主体的な生き方といえるでしょう。

(4) 光りをめざして

任運荘の廊下に甲高い声が流れてきた。「今日はおリコウさんね」幼児をあやす言葉である。のぞいて見ると、見舞に来ている娘が老親に向っていつているのである。何という軽薄、何という不遜。親の立ち直ろうとする志が、子でありながら見えていない。ベッドにおとなしくしておればよ

せわをしている。「食堂で食べるとみそ汁がとくに熱くておいしい」と語りかけます。

毎月の誕生会にはその老人たちの生活歴を寸劇で紹介することになっている。番台に坐った次郎丸さんの昔の姿が演じられ始めると、最初は驚き、次は手をたたいて喜びました。「いい湯だな」の歌が流れると、手拍子を打って大きな声で歌い始めます。ホームに来て初めての歌声です。

昔の経験が生かされてか、どんな気むずかしい人とも仲良くする力を持っています。彼女はたばこが好き。自分が飲む前に、必ず歩行器にすがって同室の山内さんに飲ませてあげます。次郎丸さんと同室になるまでは大声を出して欲求を発散させていた山内さん。その山内さんが「よか人と一緒になった」と、たばこをおいしそうに飲みながら話します。

月末は老人と担当寮母が共に話しあう反省日に当てられる。次郎丸さんは眼を細めて寮母に語ります。「わしゃ、若い時から苦労したけれど、本当の幸せは、このホームに来た時が一番じゃよ」。次郎丸さんの日々、それは平凡なりに主体的な生き方といえるでしょう。

(4) 光りをめざして

任運荘の廊下に甲高い声が流れてきた。「今日はおリコウさんね」幼児をあやす言葉である。のぞいて見ると、見舞に来ている娘が老親に向っていつているのである。何という軽薄、何という不遜。親の立ち直ろうとする志が、子でありながら見えていない。ベッドにおとなしくしておればよ

る。彼女は天涯孤独の身であるので、「私の仕事はご先祖の霊を祀ることだから、一日でも一分でも長生きしなければ」と目標を明確に定めている。

もう一人次郎丸タズ（八五）さんのことを、『にんうん荘』（26号・55・5・10）で見よう。

次郎丸さんは子供がないため嫁ぎ先から故郷の緒方町に帰り、甥の風呂屋の番台に座って身をたてていましたが、老齢になり床に伏すようになってからは、任運荘に入りたいと願いました。五ヵ月待って入所できた時の顔には喜びが溢れていました。

他の人たちが歩行器を利用しているのを見て、早速練習したいと、自分専用の歩行器の購入を申し込めます。老人は自費で購入するのを渋りがちだが、次郎丸さんは行動が積極的です。

病院生活の延長と違ってか、寝巻きのまま歩くので、朝起きたら着換えて、廊下をきちんとした身なりをするようお願いするのだが、耳が遠いので分かってもらえない。他の人の服装と見比べさせると、コックリとうなずきます。今では一番こざっぱりした身なりです。

「できることはやらなきゃあ、甘えてはいかん」自分にいいかせる。ベッドの上で縫い物をしたり、小物の洗いのものは洗濯場を利用します。次郎丸さんも三度の食事を食堂でします。雑然とおかれた歩行器を一台ずつ整理して、出入のじやまにならないようにしたり、食事がすむと身体の不自由な人のために歩行器を持ちより、助けています。

不自由な足、重い難聴、頭痛、不眠といった障害を越えて、いやな顔一つ見せず、気持ちよいお

いと思つてゐるわけである。

母は日に数十回も寮母室にやってくる。帰りたいと訴えたり、ダイヤルを回しては通じない電話に話しかけるのが日課になつてゐる。荒れゆく家が心配でならないのだ。たとえボケていようと、その子であれば母心が分かうものを、「帰られては困る」ことしか念頭にないから、母の心が見えていない。それだけではない。「おりこうにせよ」といい含めては、母の志を砕き去つてゐるのである。

しかし、今はその娘を責めるのが目的ではない。私たちの老人への接し方や世話の仕方が情性に流れると、その娘と同じか、あるいはそれ以上の過ちを犯すことを警戒しなければならぬ。

いったい、ベッドに低く横たわる者に対して、ひとは無意識のうちに見下ろす立場に立ちがちである。だから、老人を介護する者は速やかにその立場を去つて、老人の胸近くすり寄るがよい。身を屈めて、同じ水準に身も心も置いて、その心を理解する努力をし直すべきであらう。そうした姿勢をとつてゐるなら、老人の心を「救う」などということとはとても、口にできるものではない。

一口に老人を理解するというが、ひとがひとを理解することは大変なことである。前にも述べたが、ひとを理解しようとするなら、まずそのことを自分自身に許してもらわねばならない。それには自己と闘う自己否定の勇気が要る。相手に対する優越を捨てねばならぬ。利益関心も捨てよ。無条件に相手を受容せねばならない。相手と共感しあう人間関係を作ることである。

吉田松陰は教育について、それは相手に自分の命を捧げることであると語つた。この思想に、福

社の思想はひっきりつながるものであろう、相手に親身になると、相手もしだいに本当の自己を開いてくれる。ここまで至り得て、ようやく私たちは老人を援助できる入口に立ったといえよう。相手はすでに老衰期であるといって、心の中に勝手に立ち入りすぎてはならない。手を出しすぎてはいけない。

そんな面倒臭いことを考えても、また、してもおれないとする寮母が、現実の施設内でなくなことは容易に想像できる。精密機械の中に荒々しく手を入れるように、老人をいかにもベテランらしく扱う寮母が存在することも知っている。

しかし、任運荘ではそうした戒が厳しく寮母に要求されている。老人に向って、「指示」するとは許されない。ただ「支持」するだけである。「支持」とは前節の「わが心の底には」で見たように、私たちの身体で老人の身体を支えることである。老人の膚は支持してくれる者の温さを感じてくれる。だから、仕事としていつも老人に何かをしてあげているというよりは、まず老人の傍にいつも寮母が居てくれるので安心されるという関わりあいである。老人と共にある寮母の関係である。

老衰期にある老人にとって本当に必要なもの、それは「共に居てくれる」者である。末期に近い人ほどナース・コールをいつも握っており、夜間になるほど鳴らす度数も増える。何時でも何回でも駆けつけてくれる寮母がいるからである。用もないのにというとしても、用もない用も本当の用であることを、寮母はよく知っている。

社の思想はひっきりつながるものであろう。相手に親身になると、相手もしだいに本当の自己を開いてくれる。ここまで至り得て、ようやく私たちは老人を援助できる入口に立ったといえよう。相手はすでに老衰期であるといって、心の中に勝手に立ち入りすぎてはならない。手を出しすぎてはいけない。

そんな面倒臭いことを考えても、また、してもおれないとする寮母が、現実の施設内で少なくなことは容易に想像できる。精密機械の中に荒々しく手を入れるように、老人をいかにもベテランらしく扱う寮母が存在することも知っている。

しかし、任運荘ではそうした戒が厳しく寮母に要求されている。老人に向って、「指示」するとは許されない。ただ「支持」するだけである。「支持」とは前節の「わが心の底には」で見たように、私たちの身体で老人の身体を支えることである。老人の膚は支持してくれる者の温さを感じてくれる。だから、仕事としていつも老人に何かをしてあげているというよりは、まず老人の傍にいつも寮母が居てくれるので安心されるという関わりあいである。老人と共にある寮母の関係である。

老衰期にある老人にとって本当に必要なもの、それは「共に居てくれる」者である。末期に近い人ほどナース・コールをいつも握っており、夜間になるほど鳴らす回数も増える。何時でも何回でも駆けつけてくれる寮母がいるからである。用もないのにというとしても、用もない用も本当の用であることを、寮母はよく知っている。

いと思つてゐるわけである。

母は日に数十回も寮母室にやってくるのは帰りたいと訴えたり、ダイヤルを回しては通じない電話に話しかけるのが日課になつてゐる。荒れゆく家が心配でならないのだ。たとえボケていようと、その子であれば母心が分かうものを、「帰られては困る」ことしか念頭にないから、母の心が見えていない。それだけではない。「おりこウにせよ」といい含めては、母の志を砕き去つてゐるのである。

しかし、今はその娘を責めるのが目的ではない。私たちの老人への接し方や世話の仕方が情性に流れると、その娘と同じか、あるいはそれ以上の過ちを犯すことを警戒しなければならぬ。

いったい、ベッドに低く横たわる者に対して、ひとは無意識のうちに見下ろす立場に立ちがちである。だから、老人を介護する者は速やかにその立場を去つて、老人の胸近くすり寄るがよい。身を屈めて、同じ水準に身も心も置いて、その心を理解する努力をし直すべきであらう。そうした姿勢をとつてゐるなら、老人の心を「救う」などということとはとても、口にできるものではない。

一口に老人を理解するというが、ひとがひとを理解することは大変なことである。前にも述べたが、ひとを理解しようとするなら、まずそのことを自分自身に許してもらわねばならない。それは自己と闘う自己否定の勇気が要る。相手に対する優越を捨てねばならぬ。利益関心も捨てよ。無条件に相手を受容せねばならない。相手と共感しあう人間関係を作ることである。

吉田松陰は教育について、それは相手に自分の命を捧げることでであると語つた。この思想に、福

フランスの女性評論家ポーヴォワールはその名著『老い』の結論の部分で、「人間は彼の人生の最後の時期を、素手で、そして孤独のうちに迎えるべきものではないはずだ」と述べている。まして、永遠の暗闇にひとり旅立たねばならないとすれば、これほどの恐怖があるだろうか。「好きな人の部屋で死なせて」と訴えた老人の願いを、私たちは老人の性と愛の問題としてとらえてきた。それも間違いではない。しかし、それと同時に死の旅立ちに当たって、ひとりぼっちでは耐まらなという悲痛な心の叫びでもあると受けとめるべきであろう。

病が重くなると、任運荘の老人は寮母室と隣りあう静養室に移ってくる。全寮母が入れ代り立ち代り看病できる仕組みである。家族も呼ばれる。数日、あるいは十数日も交代で傍に寝起きしてもらう。こうして静養室は動的なそよぎが何時も漂う。同室だった人たち、親しかった仲間も見舞う。すぐ近くに医師住宅と病院があるのも最高の好条件で、迅速な対応が保証されている。

だから、危篤状態が十日以上続くのも普通になっている。その間、寮母や看護婦は平安な最後があるよう力を尽す。臨終近くなくても、ただ傍観しているだけの家族には足をさすらせ、手を握らすなど絶えることのないスキンシップをお願いする。

そのお願いは同時に、あの世からの親しかった身内の「お迎え」が意識薄明の中にも感じられるようにとの祈りでもある。人びとが間違いなく傍に居てくれて、「お迎え」が受けられるなら、老人は安んじられるのである。そうなれば、人間の生涯は完結していることになるにちがいない。

ユニークな心理学者だった島崎敏樹は、『生きるとは何か』（岩波新書）の最後に、「生涯の最後

に臨んでも、私たちは連れと共に光りをめざす存在のようにみえる」とっている。

任運荘の場合、連れとは最後はつれ添う家族であり、少なくともまちがいなく居てくれる寮母である。そうであれば、これから旅立つ未来がどうして暗かろう。未来はすでに先立った身内はらから招く輝く国であらう。

注——任運荘の死亡状況について

○開所以来満五カ年(50・5・15)と55・5・15)で死亡総数三十九人 その内訳はホームで三十二人
自宅に帰って四人 入院して三人(なお退所措置切れの入院死は二人)

○死亡者数 五十年(四) 五十一年(六) 五十二年(十一) 五十三年(六) 五十四年(十二)

○一年間平均死亡者数 七・八人 死亡率約一五・二%

○ホーム内での死亡時刻 夜(三) 朝(十九) 昼(十)

○ホーム内死亡者三十二名のうち、寮母が看とった者二十九名(そのうち家族が来たもの二十三名)

○苦しんで死亡(六)……うち、肉体的苦痛(五) 妻への憎しみ(一)

特養での死亡率の統計は部分的であるが、四〇%と二〇%と推計される。老人は介護の仕方によってある程度延命可能であるので、死亡率も特養の処遇の評価の一つの指標とされよう。ただし、病院と併設されている特養では病院で死を迎えさす場合が多く、その場合は死亡率は極度に低くなる。

に臨んでも、私たちは連れと共に光りをめざす存在のようにみえる」といっている。

任運荘の場合、連れとは最後はつれ添う家族であり、少なくともまちがいなく居てくれる寮母である。そうであれば、これから旅立つ未来がどうして暗かろう。未来はすでに先立った身内はらから招く輝く国であろう。

注——任運荘の死亡状況について

○開所以来満五カ年(50・5・15)で死亡総数三十九人 その内訳はホームで三十二人 自宅に帰って四人 入院して三人(なお退所措置切れの入院死は二人)

○死亡者数 五十年(四)五十一年度(六)五十二年度(十二)五十三年度(六)五十四年度(十二)

○一年間平均死亡者数 七・八人 死亡率約一五・二%

○ホーム内での死亡時刻 夜(三) 朝(十九) 昼(十)

○ホーム内死亡者三十二名のうち、寮母が看とった者二十九名(そのうち家族が来たもの二十三名)

○苦しんで死亡(六)……うち、肉体的苦痛(五) 妻への憎しみ(一)

特養での死亡率の統計は部分的であるが、四〇%と二〇%と推計される。老人は介護の仕方によってある程度延命可能であるので、死亡率も特養の処遇の評価の一つの指標とされよう。ただし、病院と併設されている特養では病院で死を迎えさす場合が多く、その場合は死亡率は極度に低くなる。

フランスの女性評論家ポーヴォワールはその名著『老い』の結論の部分で、「人間は彼の人生の最後の時期を、素手で、そして孤独のうちに迎えるべきものではないはずだ」と述べている。まして、永遠の暗闇にひとり旅立たねばならないとすれば、これほどの恐怖があるだろうか。「好きな人の部屋で死なせて」と訴えた老人の願いを、私たちは老人の性と愛の問題としてとらえてきた。それも間違いではない。しかし、それと同時に死の旅立ちに当たって、ひとりぼっちでは耐まらなという悲痛な心の叫びでもあると受けとめるべきであろう。

病が重くなると、任運荘の老人は寮母室と隣りあう静養室に移ってくる。全寮母が入れ代り立ち代り看病できる仕組みである。家族と呼ばれる。数日、あるいは十数日も交代で傍に寝起きしてもらう。こうして静養室は動的なそよぎが何時も漂う。同室だった人たち、親しかった仲間も見舞う。すぐ近くに医師住宅と病院があるのも最高の好条件で、迅速な対応が保証されている。

だから、危篤状態が十日以上続くのも普通になっている。その間、寮母や看護婦は平安な最後があるよう力を尽す。臨終近くなっても、ただ傍観しているだけの家族には足をさすらせ、手を握らすなど絶えることのないスキンシップをお願いする。

そのお願いは同時に、あの世からの親しかった身内の「お迎え」が意識薄明の中にも感じられるようにとの祈りでもある。人びとが間違いなく傍に居てくれて、「お迎え」が受けられるなら、老人は安んじられるのである。そうなれば、人間の生涯は完結していることになるにちがいない。

ユニークな心理学者だった島崎敏樹は、『生きるとは何か』（岩波新書）の最後に、「生涯の最後